



Member's Open Space

難しい言葉 (その2)

●美咲歯科医師会会員

雨田 実



前号会員の広場に難しい言葉について書かせていただいたところ、道歯会の一部の先生方からいろいろご意見をいただいた。特に池田弥三郎氏著の“手紙のたのしみ”を読みましたか?のご指摘をいただきましたことは誠に有難いことで謹んでお礼申し上げます。早速入手して、池田氏の書かれたものによると、「昭和37年頃“日本語のみだれ”について読売新聞の企画で何回か書いたものことについて、第一流の洋画家である伊原宇三郎氏から久々にお手紙をいただいた。解説はあと回しにして、その文面によると、『新聞の“日本語のみだれ”について、いつも面白く拝見していますが貴兄の書かれたものの中に、ひとつあるいはご参考になるかも知れんと存ずることがあるので、念のためお知らせいたします』という言葉から始まり『小またが切れ上がると言うが、こまたというものはないとの意味のご発言について、遠野物語を始めとして民俗学の大家である柳田国男先生にお会いした折にお尋ねしたところ、先生のご説明によると明瞭に“こまたはある”とのことで、普通の股が大またで、左右の鼠蹊線そけいせんの作る線が小またでふたつの線のなす角が鋭角的に上に切れ上がったさまをいい、そうでないのはそれが鈍角になりその違いははっきり分かるそうです。先生の話ではこの言葉は江戸の通人つうじんが初めて使い出したものようで、女性の品定めをするのに露骨な表

現ではなく、何とも江戸っ子らしいすっぱりとした表現であると感心しました』とのこと。その時一寸不安だったので、『着衣の上からでも分かりますでしょうか?』とお尋ねすると、『勿論見えます』とのことで、歩く時とか立居振舞たちいふるまいの時に、その動きによる着衣のシワ、ヒダがはっきりと角度を示しますとのことで、そのシワ、ヒダがはっきりと見えないような厚着の女性は江戸っ子のお眼鏡めがねに叶かなわぬかっこうとも、うなずけますし更に推測すれば、小またの切れ上がった女は所謂柳腰いわゆるやなぎこしのやせ型でグラマーの流行などなかった江戸時代としては、小またはひとつの大きな魅力だったのでしょう。

『小またのことはたまたま柳田先生からお伺いすることが出来ましたが、折口信夫先生のご意見はどうなのでしょう?これはとうとう何うことなしに過ごしてしまいましたが、あるいは貴兄のそういうものはない、と同じでいらしたものなのか。どうなのでしょう?貴兄にお知らせしておく価値がありそうに思えたので一筆書きました。ご自愛を祈ります』という内容のもので詳しいご教示を先輩から与えられることは全く有難いことでことに第一流の洋画家伊原宇三郎氏の女体の素描が載せられているのは誠に貴重なことだと思う。小また、大また、切れ上がった女体、そうでない女体の素描数枚によって、百聞は一見にしかず、

これですっかり氷解し、私は以後旧説のあいまいさを捨てて、もっぱら伊原氏伝承の柳田先生説に従っている。しかし伊原氏からのお手紙は私信のため誰の眼にも触れなかったわけで、この名説は世間に流布しなかったと思う。そのうち世間に妙な江戸趣味の流行が起こって、江戸っ子がる人達がさまざまな解釈をこれについていうので、私は週刊朝日の古典横丁という連載の中にこの名説を紹介した。これは古典の一部を掲出して、それを解釈し解説の文章を付けるといった構成で20回位続いたという。それを引用する。

OL読むべからず。古典横丁おんな生態講座。
小またの切れ上がった女。どうか、小股の切れ上がった、水気たっぷりという名婦人を生捕りてえものだ。小袖曾我薊色縫

どうぞして、いい女をとつかまえて、酒の相手でもさせてえもんだ。こう小股が切れ上がってよ、水もしたたるような女を、よう。御家人くずれみたいな、門前町のごろつきみたいなのが、鳥居前の茶屋の縁台でよきかも、ござんなれと、舌なめずりをして待っている時の仲間うちのやりとりの文句に、黙阿弥にこう言わせてくれる。さてこの小股の切れ上がったというのが、毎々のことながら問題だ。中には目尻が切れ上がっていることだ、などと言っている人もあるが、そんな狐がついたみたいな顔の女がいいはずがない。だいいちこの説では、小股がどこを指すのか分からない。小股はもものつけ根の鼠蹊部の左右の線を描く角がそれで、その反対のもの内側の作る角が大股だ。小股の切れ上がるのは、その角度が鋭角でぐっと上までその線が際だっていることだ。これがまえまえから“小また”というものはないものとして他人にもたずねられれば語り、ものの本にも

発表していた」池田氏が「洋画界の第一流の伊原氏から、小または明瞭にあるとの柳田国男先生の解釈を絵入りで教えられてから私は、伊原氏伝承の柳田先生説に従っている」と書かれているが、文学博士で大学教授の池田氏がそういうものはないという旧説を捨てて、あるという新説に従うまでは更に多くの資料を求めるために充分な日時を費やされたであろうことは、旧説が昭和37年に新聞に載ってから、新説が週刊朝日に古典横丁として載るまで13年の歳月が経っている事実が如実に語っている。学者の仕事とは呼吸長く続けなければならないものと前から聞いてはいたけれど。

話は変わるが現在は散髪店では電気バリカン専門であるが、何年か前の床屋時代はバリカンは手動のものが大部分であったが、あれをバリカンと呼ぶのは日本以外にないらしい。トランプもそうらしいが、言語学者の金田一京助氏がバリカンの語源を調査した結果、バリカンとは製作した町工場の名称と分かったが、その調査に3年の歳月を要したとのことであり、学者の仕事は地味であるだけに貴重といえるのであろう。池田氏が古典横丁に小股の新説を連載したところ、柳田先生の説を伝承した伊原氏がそれを読まれて小股云々の後釈ともいうべき手紙を池田氏にしたためており、なかなか味のある内容で、小股云々の後釈というに相応しいと思うけれど紙面の都合で次号に譲りますます。乞うご期待!!